

..... 3章

アセスの 基本的な読み取り方

本章では、「個人特性票」と「学級内分布票」の基本的な読み取り方のポイントと、事例を通して、分析結果の理解の仕方について解説します。なお、本書の印刷はモノクロですので、付属のCD-ROMのサンプルデータを見て、色を確認しながら読み進めることをおすすめします。

①「個人特性票」の基本的な読み取り方

(1) 40未満の要支援領域の因子を確認する

「個人特性票」(図2-9, 26ページ参照) **A**の表の数値は、平均が50で、偏差値とほぼ同じような数値ですので、40を下回るようであれば相当適応状態が悪いと考えられます。特に30を下回っているような場合、本人がSOSを感じている度合いはきわめて高く、本当に早急な支援が必要です。

左下の**B**のレーダーチャートでは、黄色で塗られた領域が40未満の領域です。したがって、40未満の数値になっている場合は、実際の様子をしっかりと観察し、何らかの支援を考える必要があるでしょう。

(2) 全体的適応感を示す「生活満足感」を確認する

「個人特性票」の**A**の表の一番上に「生活満足感」の結果が出力されます。この「生活満足感」は、**A**の表と**B**のレーダーチャートでは数値で、右下の**C**のXYプロットでは、30未満は赤い△、30以上40未満はオレンジの◇、40以上50未満は緑の○、50以上は青い○で表示されています。赤い△の場合、支援ニーズはきわめて高いこととなります。

「生活満足感」は全体的適応感を測定していますが、他の5つの因子は領域別の適応感を測定していますので、質が異なっています。どちらが重要かと言えば、「生活満足感」です。たとえば、要支援領域の40を「学習的適応」や「友人サポート」は下回ったけれども「生活満足感」は50を超えているような児童生徒の場合、その子どもは「勉強もよくわからないし、友だちからのサポートもあんまりないけれども、気分的にふさぎ込んでいるわけでもない」ということを意味します。つまり、不適応感をもっている領域は、「学習的適応」と「友人サポート」に限定されるということです。これは支援自体は必要だけれども、重篤度という点から見るとさほど高くはないことを示唆しています。

逆に、領域別の適応感である5つの因子得点が50を超えているのに、「生活満足感」だけが40を下回るような場合、「精神的に苦しい」と思っている度合いは高くなります。領域は限定されず、毎日毎日の生活自体が不適応感に満ちているということになります。その分だけ、支援の必要性も緊急度も高くなります。赤い△の場合、つまり30を下回るような場合は、たとえば今日まで学校に来ていても、明日から不登校になるような危険性を秘めていると考えてください。

(3) 因子間の相関を踏まえて「生活満足感」の数値を解釈する

図3-1に、1章の図1-2を再掲しました。これを見ると「生活満足感」には他の5因子すべてが影響しています。したがって、「対人的適応」を構成する4因子（「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的関係」）が低い場合も、当然その影響が「生活満足感」に及ぶのが一般的です。

個人特性票で言えば、XYプロットで黄色い領域に位置する児童生徒、特に「対人的適応」も「学習的適応」も要支援領域に位置づく（XYプロットの左下の第3象限）ような児童生徒の場合、「生活満足感」についても、ある程度低くなるのが一般的です。

たとえば、先にあげた、「学習的適応」や「友人サポート」が40を下回ったけれども「生活満足感」は50を超えているような児童生徒の場合、通常でしたら「学習的適

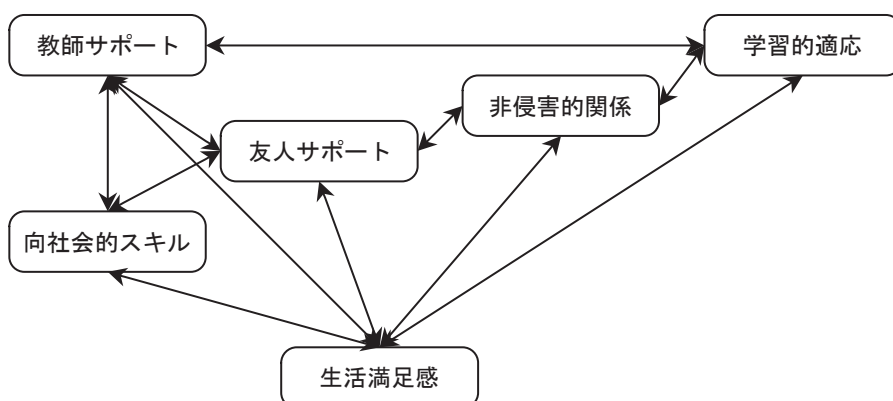


図3-1 相関関係から見たアセスの構造

応」や「友人サポート」が低いわけですから、「生活満足感」も低くなるのが一般的です。しかし実際にはさほど低くないとすれば、何らかの理由が考えられます。たとえば、「学習をそれほど重視していない」といった場合や、「友だちがいなくても苦にならないタイプ」の児童生徒の場合は、さほど「生活満足感」への影響は大きくならないでしょう。また、「家庭適応が非常によい」ような場合は、学校ではうまくいっていても、そこで支えられて「生活満足感」が下がらないということも考えられます。

これに対して、領域別の適応感である5つの因子得点が50を超えているのに、「生活満足感」だけが40を下回るような場合は、領域別の適応はよいわけですから、それ以外の要因、たとえば家庭やそれ以外の場（スポーツ少年団やクラブチーム、地域の仲間集団等）での適応がよくないことが影響しているかもしれませんので、そういった場での様子を把握する必要があります。

(4) 因子間の相関関係を踏まえて「対人的適応」を考える

「生活満足感」以外の5つの領域別因子の間にも相関関係はあります。アセスでは、「対人的適応」を「教師サポート」「友人サポート」「非侵害的關係」「向社会的スキル」の4因子でとらえています。「対人的適応」に課題があった場合、特にこの4因子の数値や相関関係を考えながら、原因や方策を考える必要があります。

たとえば「友人サポート」得点が低く「向社会的スキル」得点も低い児童生徒がいた場合、スキルの低さが友人関係を築くことの障害となっている可能性が高くなります。しかし、「友人サポート」得点が低いけれども「向社会的スキル」得点は高い児童生徒の場合、向社会的スキル自体はあるわけですから、話の合う友だちがいなかったり、同じ部活動に所属する友人がクラスにいなかったり、あるいは人間関係を壊すようなトラブルがあったりといった、スキル以外の要因が「友人サポート」の低さにつながっている可能性が高くなります。

このように、同じ得点であったとしても原因が異なる場合があります。それを読み解くには因子間の相関を考えることが大切です。

(5) 学習に関連する適応を総合的に考える

アセスでは、学習に関連する適応を1因子でとらえています。ただし、この中身をもっと分析していくと、実はいくつかの因子がまとまったものと考えられます。たとえば「学習効力感」（学習能力に対する自信）や「学習への動機づけ」といったものがあげられるでしょう。中学生や高校生では、進路適応の問題がこれらに影響していることも想定されます。

また、因子間の相関関係を見ると、「学習的適応」に強い相関をもっているのが「非侵害的關係」です。したがって学級内でいじめやからかいのような侵害的行為を受けている「非侵害的關係」の低い児童生徒は、心理的な安心や安全が保障されないため

に、勉強どころではなくなってしまう、「学習的適応」が低くなる可能性があります。

このように「学習的適応」は1因子構造なのですが、多様な可能性を含んだ因子ですので、「学習的適応」が低い＝「勉強ができない」という図式でとらえるのではなく、「勉強がわからないのかもしれない」「進路で悩んでいるのかもしれない」「やる気が出ないのかもしれない」といったように、多面的に考えることが必要です。

(6) 相関関係を考えて支援方策を構築する

「個人特性票」の目的は2つあります。1つは、これを用いて個々の児童生徒の適応状態を理解（アセスメント）することです。もう1つは、これを用いて個人に対する支援計画を立てることです。ですので、(1)～(5)で説明してきた観点から一人ひとりの状態を確認したら、次は支援方策を考えることになります。

その方策を考える際も、因子間の相関を考えるといいでしょう。たとえば「非侵害的關係」の得点が低い児童生徒がいた場合は、その児童生徒に対して何らかの否定的なかかわりが存在することを示唆しています。その児童生徒にどのような支援をすればいいのでしょうか。直接本人の話を知ったり、いじめ等の事実が確認されれば何らかの指導が必要になるでしょう。ただ、そのようなかかわりは「教師サポート」ですから、相関関係を見る限り「非侵害的關係」との相関は高くありません。つまり「非侵害的關係」の低さの改善にはあまり有効ではない可能性があります。一方で「友人サポート」は「非侵害的關係」とは高い相関にあります。

こうした点を考慮すると、その児童生徒に対する「友人サポート」を高めるような支援の有効性が高いと考えられます。したがって、実際にいじめ等が確認されれば、教師が事実関係を把握していじめの防止を図るとともに、当該児童生徒に対する友人のサポートを厚くする取組を意図的・計画的に実施することが望めます。

同様に、「学習的適応」を促進するには、教師が直接的に「学習的適応」を促進するような支援を提供するルートと、「向社会的スキル」と「友人サポート」に教師が影響力を発揮することで、「非侵害的關係」を促進し、その結果として「学習的適応」を促進するルートの2種類があることがわかります。後者は“対人関係にかかわる学級経営”とも言うべきルートですが、「学習的適応」を促進する上でも、このような学級経営の重要性を示唆していると言っていいでしょう。このように因子間の相関関係は、支援方策を検討する際に役立てることができるのです。

2 事例で学ぶ「個人特性票」の読み取り方

次に、事例に沿って「個人特性票」の読み取り方について解説していきます。

(1) 勉強ができ、やや物静かなA君

A君は勉強ができ、クラスでも一目置かれている、やや物静かな生徒です。

① 40未満の要支援領域の因子を確認する

要支援は「生活満足感」だけです。ただ、レーダーチャートを見ると、全体的に輪が小さめで、要支援領域に近いところにプロットされている因子が多いです。適応状態はあまりよくないことが推察されます。

② 全体的適応感を示す「生活満足感」を確認する

①で見たとおり、XYプロットではオレンジの◇で、緊急というほどではないにせよ、状態が悪いことが確認できます。

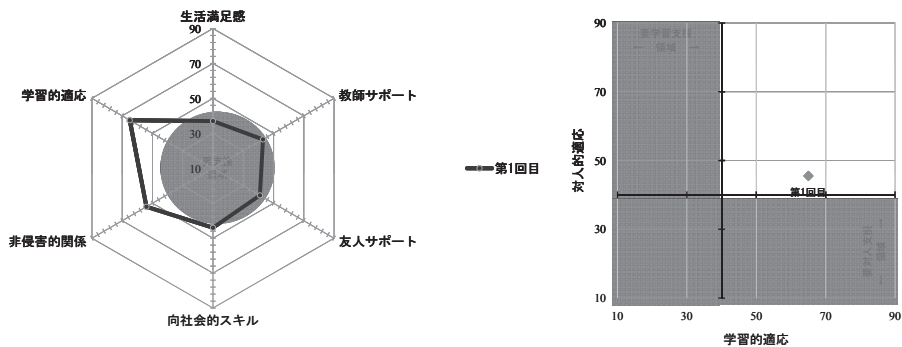
③ 因子間の相関を踏まえて「生活満足感」の数値を解釈する

「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」も40台前半の数値となっています。「生活満足感」は他のすべての因子と相関関係がありますから、これら3つの因子の適応感の悪さが「生活満足感」に影響を与えている可能性があるでしょう。数値からすると、家庭もA君のしんどさに気づいていない可能性が高いです。

④ 因子間の相関関係を踏まえて「対人的適応」を考える

「対人的適応」の4因子を見ると、「非侵害的關係」は良好ですので、いじめやからかいといったことはないと考えてよいでしょう。「向社会的スキル」は44ですので、要支援領域ではありませんが、あまり得意というわけでもないようです。そのことが41という要支援領域ぎりぎりの「友人サポート」得点につながっている可能性があります。「教師サポート」も43と低めですが、ひょっとするといじめやからかいもなく、

適応次元	第1回目	第2回目	第3回目	最終回のコメント	適応次元の特徴
生活満足感	37			生活全般への適応感がやや低くなっています。生活や他の適応度を確認しましょう。	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示します。
教師サポート	43			特になし。	担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好だと感じている程度を示します。
友人サポート	41			特になし。	友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示します。
向社会的スキル	44			特になし。	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示します。
非侵害的關係	54			特になし。	無碍やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示します。
学習の適応	65			特になし。	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示します。



注) 得点は標準化した「適応度」で、高いほど適応的であることを示します。左のチャートは、6次元での適応を示し、カラー線が外側に広がるほど、適応しています。オレンジの領域は要支援領域(<40)です。右のプロットは、学習の適応と対人的適応次元での適応を示し、右上ほど適応しています。それぞれオレンジの領域は要支援領域(<40)です。マーカーは、生活満足感の適応度で、要支援は赤の△(<30)とオレンジの◇(<40)で、適応群は緑の○(≧40)青の○(>50)で示してあります。グラフの読み取り方は、解説書2章、3章を参照してください。

図3-2 A君の「個人特性票」

人間関係も得意ではないが、挨拶をするなどの必要最低限の向社会的スキルはもっており、学級内で多少は会話もしているので、教師の目には「問題のない子ども」と映っていて、ノーマークになってしまい、支援が薄くなった可能性があります。

⑤ 学習に関連する適応を総合的に考える

「学習的適応」は非常に高く、問題はありません。ただ、A君の場合、それが周りから一目置かれるような関係を助長し、A君の孤立感を高めたのかもしれないし、「教師サポート」が低い原因になったのかもしれない。

⑥ 相関関係を考えて支援方を構築する

A君の「個人特性票」からは、「勉強ができてみんなから一目置かれていて、先生もそう思っているけれど、実は人間関係が苦手で、自分から友人の輪に入っていくほどの向社会的スキルはもっておらず、友人から孤立傾向にあって苦しんでいる。それに教師も気がつかないでいる」というような姿が浮かんできます。

さて、支援ですが、SOSを発してはいますが、赤の△ほどではないことから、早急に集中的に、というほどでなくてもよいでしょう。

具体的な方策としては、たとえば次のようなことが考えられるでしょう。

- ・話を聞く機会をそれとなくつくり、教師との信頼関係をつくる。
- ・班活動場面などを設定しても「向社会的スキル」が低いので、動けなかったり、浮いてしまう可能性がある。エンカウンターのような人間関係づくり、あるいはコミュニケーションスキルを学ぶような取組を計画的に実施する。
- ・個別相談の中で、友人とのかかわり方についてアドバイスする。
- ・「学習的適応」の高さをリソース（資源）として生かし、協同学習的な取組の中で他者をサポートするような場面をつくり、友人関係を広げる。

(2) 明るく活発な、リーダー格のBさん

Bさんは明るくて活発で、成績もよい、リーダー格の女子生徒です。

① 40未満の要支援領域の因子を確認する

40未満の要支援領域に入っているのは「生活満足感」だけです。右下のレーダーチャートを見ても、輪は比較的大きく、黄色い要支援領域からは離れています。

② 全体的適応感を示す「生活満足感」を確認する

Bさんは、XYプロットでは右上の第1象限に位置しています。XYプロットは縦軸が学校での「対人的適応」、横軸が「学習的適応」ですので、Bさんは学校では対人関係も学習面の適応も良好であるということです。これらの因子得点は「生活満足感」に肯定的に反映するはずですから、Bさんのように第1象限に位置づく児童生徒の「生活満足感」は高くなり、したがって色は緑や青になるのが一般的です。しかし、Bさんの場合はオレンジの◇で、実際の数値は37と要支援領域です。深刻度は赤の△ほどは高くないですが、支援が必要そうです。